

ふ也、書によりたる空論にはあらず、又今俗にいふ青き蝗丸に似たる虫を、きりぐすと呼是
はいにしへの機織女也、其鳴聲キイ引引と聞えて、機を織音の如し、名義聲とよくあへり、豊香
田田森が説にズイチョンを機おり虫といへるはうけがたし、又野洲良が説に、つゞりさせよと
なく聲きりぐすと不聞、今いふ青き虫の方はキリキリと聞ゆれば、是古代のきりぐ
すなるべしといへど、此説もうけがたし、そは今俗にいふきりぐす、古代のきりぐならん
には、霜夜又壁などよむべからず、殊に枕の草子の九月晦日、十月朔日のほどに、只あるかなき
かに、聞付たるきりぐすとといふ文にも不合也、今俗のいふきりぐすにはあらざる事無論、
又資重原が説に、今の方正しといふもうけがたし、そは神樂歌にきりぐすのねたさうれ
たさ、御園に参りきて、木の根ほりはむ角をれぬといふを、證に引たれど、今俗にいふきりぐ
すは、草の葉かげなどに住て、木の根などほりはむ物にあらず、こほろぎの方は、土に穴して住
ぬれば、木の根など、いとよくほる物也、是をもても、其物を辨別すべし、今俗にいふきりぐす
は、八月すゑには、多く死す物にて、九月晦日、十月朔日までは、いきん事おぼつかなし、キイ引キ
イ引となく方は、事によりては十月中迄もいと加すかになくを聞し事有、是ぞいにしへのき
りぎりすなる、

〔萬葉集八秋雜歌〕湯原王蟋蟀歌一首

暮月ユヅク夜心ヨココロ毛思モシ努爾ヌル白露シラユ乃置ノオキ此庭コノニハ爾蟋蟀ニキリ鳴毛ナゲモ

〔萬葉集十秋雜歌〕詠蟋蟀

秋風アキカゼ之寒吹ノサムクフ奈倍ナベ吾屋前ウラヤノ之淺茅ノアサチガ之本ノ蟋蟀ニキリ鳴毛ナゲモ

〔萬葉集略解十下〕蟋蟀舊訓きりぐすとよみたれど、翁これをこほろぎと訓り、略中蜻蛉と蟋

蟀は同物なれば、蜻蛉に古保呂木と有にて、古より蟋蟀にこほろぎの名有事略えなく、今の世に